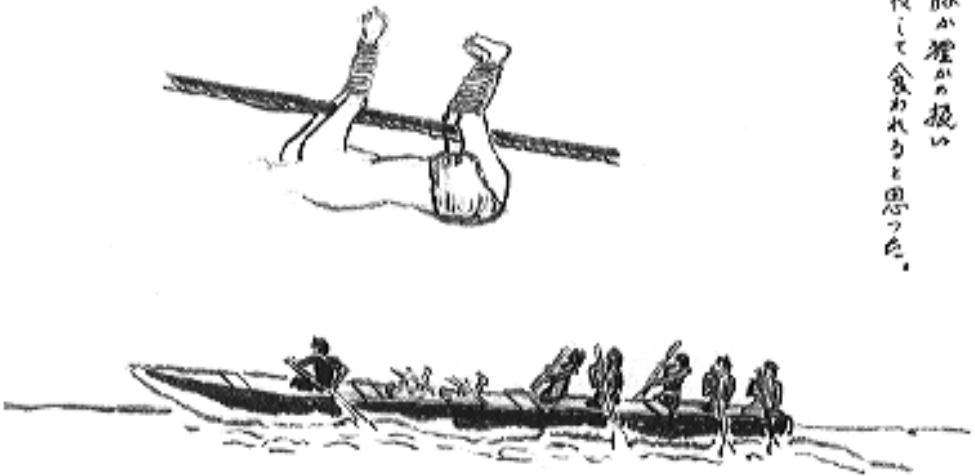


第十八回

豚か狸が投
殺して食われると思つた。



とうとうとうで、また一巻の終りか？
やうとうまで生き延びてきたのに、なんともいやな終りかただ。もう少しましな死に方ができないものかと思つていると、われわれを袋だたきにした屈強の若者たち十四、五人がやつて来て、結わいた手と足の間丸太を通し、まるで豚か狸を生け捕りにしたように前と後ろで担ぎ上げて運び出した。

そんな格好で部落を出た。われわれ二人を生贖いけにえとして、なぶり殺しにでもするつもりか？

それとも、部落の中で料理され食われてしまふのではないのか？

そのまま訳の分からない掛け声よろしく山を下りはじめた。どこか違う場所であるんだなとうとうでもしると思つて、と、何時までたつても下るさな。

何かのまじないのつもりか？

これがこの辺のしきたりなのか？

あれこれ考えているうちに、頭の中が真つ暗になり、不安と苛立ちで一杯になつてきた。

それにしても馬鹿に遠くまで、手間の掛かることをするもんだと思つていると、海岸に出た。そつか海へ突き落とすのかと観念していると、二十人乗りぐらゐの丸木舟へ投げ込まれた。

みんな歓声をあげて沖へ漕ぎ出した。なぜか船端を叩き、勝ち誇つたような仕種で、勝鬨のよつな声をあげて歌っている。櫂をこぐリズムにのせて大喜びで歌っているのだ。

何時間かつたかよく判らないが着いたところはなんと米軍のツツキ基地だつた。

捕虜

その頃の戦局は

一九四二年（昭和十七年）

十一月五日 連合軍、ガダルカナルを増強。

十日 第三十八師団六百人の増援部隊、ガダルカナル島に上陸。

十二日 第三次ソロモン海戦。

ガダルカナル島砲撃の任務をおびた海軍挺進攻撃隊、米水上部隊と交戦。

十六日 連合軍、ソロモン諸島ブナ南東オ口湾付近に上陸。

十七日 ブナ方面に増援部隊揚陸。

三十日 ルンガ沖夜戦。ガダルカナル島輸送の駆逐艦八隻、敵有力部隊と交戦、揚陸不成功。

十二月八日 ニューギニアのパサブア守備隊玉砕。八百人戦死。

十八日 ニューギニアのウエワク・マダン占領

ツリギ

われわれ二人は西フロリダ島に上陸以来、無我夢中で島の中を歩き通したので、ツリギからだいぶ遠く離れたつもりでいたのだが、ツリギがこれほど近かったのは驚いた。

結局われわれの行動範囲は、島の上陸地点近くをつろつろしていたばかりで、いわば小さな島内を堂々巡りしていたにすぎなかつた。

米軍は酋長たちへ布令を出し、日本の敗残兵を生け捕りにした場合、褒美に刃物や布地をやっていたらしい。

この布令のおかげで、二人は現地人に殺されずにすんだともいえる。

しかしすでに述べてきたように、日本軍人なら捕虜になる前に死を選べるときびしく教育されてきた、逃げて逃げて逃げ回ってきたものの力及ばず、とうとう敵の手に落ちてしまったことは軍規に反し、その罪、万死に価するに等しかった。

米軍に突き出されて、最初にわれわれと相對したのは、通訳と軍医らしい兵隊だった。軍医はわれわれが縛られている両手両足の木の皮をナイフで切り、後頭部の傷や鼻血の治療をしてくれた。

通訳から立ちてみるといわれたが、とても立てるものではなかつた。

現地人の縛り方は日本のとはちがひ、両手両足に木の皮をただぐるぐる巻きにして、皮の最後を巻いた中へ突っ込み、その上をまた同じように巻くという単純な方法だが、六時間ちかく縛られたままだったので、一通りの苦しきではなかつた。両手はゴム手袋のように紫色に腫れ上がり、両足も同じようにぱんぱんに腫れ上がって、手を握ることもできなかった。

島の男たちは褒美を貰うのにぎやかに帰っていた。

つぎに会ったのは、尋問の内容から察して諜報機関の将校らしかつた。わが軍の内情、部隊、階級、名前を聞かれた。

捕虜になつてしまった自分がいまできることは敵に本当のことを自由しないことだと思案の末、すべて嘘をついた。

「このときから私の名を、田中」にした。